

疼^う_ずくひと

とどのつまりは、自分をどこまで解き放てるか。

あるがままの自分の、完全なる自由。

それが、いつの頃からか彼女が求めるようになったものだ。

常識、社会的な規範、世間の眼、愛する者たちの願い、そのときどきの美学……。

いずれにも頓着せず、私自身とんちやくでいること。

それは、人生におけるいちばんの価値を、孤独におくことでもある。

1

白木のまな板の上に、薄くそぎ切りにした刺身用の鯛を十枚ほど並べて、塩をふっておく。次に、昆布を二枚、二十センチほどの長さに切って、酢で湿らせた布巾で両面を丁寧にぬぐう。

壁の時計はもう午後九時を回っているが、燿子は、こうしてひとつひとつの手順のどれも省略せず、丹精こめて、且つ手早くする料理の時間を大事にしている。食べたいものを、食べたいときに。誰のためでもなく、自分のために。

料理をする時間も、食べるタイミングも、世間的なルールからは外れていても、己の内からの欲求に従って作り、ひとり気ままに味わう食事。

それが、唐沢燿子が七十歳を目前に手に入れた、かけがえのない時間だ。

昆布の板の上に、鯛のそぎ切りを並べていたとき、スマートフォンが鳴った。

親友の広田繁美からだ。

燿子は、抜き取ったキッチンペーパーで指をぬぐうと、スマホをカウンターに置いたまま、着信とスピーカー、二つのボタンを一度に押した。

「お久しぶり。生きてた？」

繁美の一オクターブ高い声が部屋じゅうに響きわたって、燿子は慌ててスマホを手に取り、音量を低くした。

「一昨日話したばかりじゃないの。今、料理中なのよ」

と、ぶっきら棒に答えるこちらも相変わらずだ。

別に不機嫌なわけではないが、近頃は、一日じゅう誰とも話をせずに過ごす日が多いので、最初に出る声は、いつも喉に何か引つかかったようなダミ声になってしまう。

「こんな時間に料理なんて。いったい何を作っているの？」

「鯛の昆布メ」

「昆布メ？ それを手間暇かけて作って、今日もひとりぼっちで食べるわけね」

繁美は、愛情と同情が入り交じった声で言うと、すぐに用件に移った。

「あのね、夕方潤ちゃんからラインがあったのよ。百か日が終わってやっと落ち着いたら、皆で会いたいって」

「そう言えば、香典のお返しが出来たね。私もそろそろと思っていたところよ」

「それでね、美希子とも話したんだけど、燿子の誕生日が近いでしょう。集まるなら、皆で古希のお祝いということにしない？ そのほうが潤ちゃんも気が楽だと思う」

「誕生日？ そんなの、祝うことでも何でもないわ。それに古希だなんて。やめようよ、そういうの」

「やっぱり。燿子はそういう年寄り臭いことが嫌いだから、反対すると思った。まあ何でもいいから、とにかく会おうということになって。日にちはまず、いちばん忙しいあなたに聞いてみることに」

長くなりそうな言い訳を遮って、

「お祝いとかはやめようね。潤を励ます会でいいじゃない。それに、今の私はぜんぜん忙しくないの。日にちは三人で決めてもらったから、いつでも合わせられるわ」

燿子がたたみかける。

「わかった。それじゃあ、また三人で相談するね」
昔からせっかちな繁美は、あつという間に電話を切っていた。

燿子と繁美、そして美希子と潤の四人は、ともに通った東京下町の都立高校で、いつも一緒に行動した、仲のいいグループだった。

同じ学び舎で机を並べた彼女たちとも、高校を出て、早や半世紀のつき合い。思春期にはさしたる違いのなかった少女たちも、卒業後それぞれの道に進むと、四人の女の人生と境遇は大きく違っていった。

子育てや仕事に追われていた頃は滅多に会うこともなく、燿子にはそのときどき、繁美たちよりも価値観が合い、深い話もできる友達が何人もいた筈だった。

が、そんな人たちとも今は疎遠になって、再び高校時代の四人組がいちばんの友達になっっている。

仕事の場で出会った人たちには、やはり無理をしていたのだろうか？ 自分を偽ったり、装ったりしていたのだろうか。

繁美たちといるときは、それがなかった。ありのままの自分でいられる、気の置けなさが心地いい。

そうした気持ちの変化も、迫りくる老いのせいなのかもしれない。

高校生の頃、四人の中でもいちばん引っ込み思案で、影の薄い存在だった唐沢燿子が、社会の一線で働く女になり、結果バツイチ、子ども一人。ついこのあいだまでテレビドラマの脚本家として、グループの誰よりも華やかな世界で活躍していた。

広田繁美は、高校時代から皆のリーダー的存在だったが、高校を卒業と同時に丸の内の手元企業に就職して、職場結婚をした。

夫の健介は、その一部上場企業の役員を、七十年代半ばになった今も続ける、現役のエンジニア・ビジネスマンだ。授かった三人の子は皆優秀で、それぞれ家庭を持って巣立っていき、今、五人の孫に恵まれた繁美は、四人の中の誰よりも安定した人生を送っている。

いちばんの秀才だった武田美希子は、高校を出たあと国立大学に進学し、子どもの頃からの夢だった中学教師になった。

三十代のはじめに先輩教師と恋に落ちて以来、ずっと独身を通してきた。その青柳先生との不倫の仲が、もう四十年近く続いている。

グループ一の美人で、教室のマドンナ的存在だった杉崎潤は、卒業後美大に進み、大学の同級生だった画家と結婚した。

あれだけ望んだ子どもに恵まれなかった彼女は、四十を過ぎた頃、自宅の近くに店を借り、夫婦で始めた画廊喫茶を慎ましく営んできた。

ところが半年ほど前、突然、夫の孝之が末期のすい臓癌と診断され、あっという間にこの世を去ってしまったのだ。潤は葬儀の後、夫がこよなく愛した店を今後守っていくつもりだと、気丈に燿子たちに語っていた。

これで四人のうち、伴侶と番で生きていたのは、繁美ひとりだけになってしまった。燿子は、高校時代のあの頃を振り返って、改めて思うのである。

「女の人生は、最初に出会った男によってきまる」ということを。

そして「女の人生の転変には、常に愛の問題が絡んでいる」ということも。

古希か……。

皿にのせた昆布メにラップをかけて、冷蔵庫に入れながら、燿子は考える。

「酒債は尋常行く処に有り 人生七十古来稀なり」

酒代のツケは、自分が普段行くところにはどこにでもある。しかし七十年生きる人は、古くから稀であるという、たしか杜甫の詩から取られたのだけと独りごち、「そんなもの、今では稀でも何でもないわ」と、心で悪態をついた。

最近では、人生百年時代などと言われ、杜甫の時代に比べれば、健康寿命も格段にのびている。渋谷や表参道ならいざ知らず、日本じゅう何処に行っても、街を歩いているのはひと目で七十代、八十代とわかる老人ばかりだ。

当事者となった身にすれば、七十歳など、まだまだ社会の第一線で活躍できる歳ごろだ。

中国の、しかも千年以上も前のモノサシがいまだに使われているなんて、おかしいではないか、と抗議したい気持ちにもなるのだった。

思えば六十歳になった頃は、自分の認識と、世間からの扱われ方のギャップが大き過ぎて、「還暦祝い」も「赤いちゃんちゃんこ」も、ジョークとして笑い飛ばすことができていた。

が、あれから十年が過ぎた今は、「古希」と言われただけでこんなにも心が塞ぎ、その現実を受け入れ難い気持ちになっている。

ならばこの疎外感も、自身が「古い」を実感している証なのかもしれない。

実際、燿子はひとり暮らしのなかで、昨日できていたことが今日はできなくなったと思うことが多くなった。

たとえば、月に一度宅配便で届く、十二リットル入りの天然ミネラルウォーターの重いプラスチック・ボトルを、ウエストほどの高さのサーバーにセットするのも大変になっていく。また、天井の蛍光灯の寿命が来て、チカチカと点滅し出したときなど、あの大きな丸いカバーをどうやって外し、新しいのに取り替えたらいいかと、途方に暮れることもある。買い物帰りの重い荷物が辛くなったし、坂道を歩けば息切れすると、挙げればキリがないほど立派に老いを自覚しては、不安のよぎる日々なのだ。

だから誰からにせよ、古希など祝って欲しくないし、世間からもことさら「老人」というカテゴリーに入れてもらいたくない。

この過敏な感情は、はじめて経験するものだった。

書店に堆く積まれた雑誌や、日々の騒がしいテレビ番組、どれを見ても女性の価値は「若い」と「可愛い」で溢れている。

男たちの金儲けのために恋愛さえ禁じられて、歌い踊るアイドル・グループの姿を、痛々しく眺めては、心塞ぐこともしよっちゅうだ。

それにしても、どうして日本の男どもは、女性を歳で選り分けるのか。

ドラマの裏方だったから、局の女子アナのように若さや年齢で選別されることはなかったが、組織で働く女性たちが、日本ならではの「男社会」に苦しめられているのを、嫌と言うほど見てきた燿子である。

離婚後に、年齢よりも才能がものを言う職業を選んだのも、それを知っていたからだ。

それでも、脚本家として高い評価を得た五十代になると、「先生」と呼ばれる陰で、「怖い」や「煙たい」という形容詞が何かとついて回った。

六十代を迎えると、「唐沢燿子はもう古い」と言われることが多くなった。その後、御用済みとなるまでの時間は、坂道を転げ落ちるが如く、あっという間の短さだった。

実際、少子高齢化の逆ピラミッドの時代が進むにつれて、かつてあれだけ輝いていた団塊の世代は、日に日に肩身の狭い立場に追いやられている。

ついこの間も、海外で十代の若者たちが「OK Boomer」と叫んでいるとの報道を知って、暗澹たる気持ちになったばかりだ。

考えてみれば、半世紀前の燿子たちも、大人たちに異を唱える、世界じゅうの十代のなかの一人だった。あの頃、若者たちの抗議の矛先は、ひとえに国家や権力に向かっていた。だが、今は違う。

若者たちが、「ベビー・ブーマー世代は黙っている」と公言して憚らない世の中になって、彼らが敵視するのは、権力よりも、市井で一生懸命生きてきた高齢者たちだ。

年寄りがこれほどまで生き難い時代が、かつてあっただろうか。

最低あと二十年は生きなければならぬのに、この疎外感は何なのだろう。

そういえば昔、作家の横光利一だったか、「初めて年をとった価値がわかってきた。非常に新しくなってきた。年をとるのも新しさだ」と語っているのを読んだことがある。

そのときの横光はまだ五十前。そして胃潰瘍を患った直後、終戦の翌々年に亡くなったのだった。

「年をとるのも新しさだ」とは、自らの死を予感しての思いだったのか。

自分は、横光より二十年も長く生きながら、僻みと疎外感のあわいを、いまだ彷徨っている。それを情けなく思うこともある。

一方で、燿子は最近、人生の仕舞い支度について考えることが多くなった。

ひとり暮らしも長くなると、自分が死んだ後のため、いかに身辺整理をしておくかが、喫緊のテーマにもなっている。

燿子は、数年前に九十五歳の母親を送ったとき、亡き母の引き出しや文箱に大事に仕舞われた、おびんた夥しい数の手紙や日記類を見つけて、驚き、呆れたものだった。

こういうものを、母は死んだ後、娘たちに読んで欲しかったのだろうかと考えると、とてもそうは思えなかった。もし母が、晩年認知症になどならず、自分の死期を予測できていたら、それらの品も早めに始末しておいたことだろう。

潤は、夫の孝之を送ったとき、遺品の中に、妻の自分が知らなかった夫の過去を見つけただろうか。もし彼が、他の女からもらったラブレターなどを残していたとしたら、いったい彼女は何を思っただろう。